

<平成21年度学部附属共同研究報告>

基礎・基本の定着を図る集団活動を取り入れた 学習指導の工夫

宇田廣文¹⁾・添田佳伸²⁾・藤井良宜²⁾・崎田茂樹³⁾・甲斐淳朗³⁾
堀 真朋³⁾・小出 純⁴⁾・島崎賢司⁴⁾・河野和弘⁴⁾

1 研究の目的

平成20年に告示された算数・数学科の学習指導要領における改訂のポイントとして、次の点が挙げられる。

発達や学年の段階に応じた反復による指導の充実（小・中学校での指導内容の一部重複）
国際的な通用性、内容の系統性の確保や小・中学校の学習の円滑な接続の視点から必要な
指導内容の充実

- ・小学校では図形（合同や対象など）や数量関係（文字式など）の充実
- ・中学校では「資料の活用」を新設し、統計に関する指導の充実

本年度は、上記を踏まえ、小・中学校の円滑な接続という視点から、指導方法の一貫性を図るとともに、更なるデータの蓄積を行うことを目的とする。特に、指導方法の工夫という点に関しては、基礎・基本の定着を図るために集団活動を積極的に取り入れ、その有効性について検討する。

2 研究の概要

本年度の研究は大きく以下に分けられる。

計算技能調査

毎年継続的に行っている調査であるが、数と計算(数と式)領域における計算技能調査を継続的に実施することによりデータの更なる充実を図るために行った。この調査によって児童生徒の学力の推移を継続的に図ることができる。6月から調査問題の検討を行い、11月に調査問題が出来上がった。調査の実施は12月から1月にかけて行っている。1月にデータ入力をし、その後分析をすることになっている。

乗り入れ授業

乗り入れ授業についても毎年行っているが、本年度は、附属小学校教諭による中学校1年生を対象とした授業を堀 真朋が行った。単元は「平面図形」で、内容は「線対称、点対称の性質を使った発展的な学習」であった。小学校における指導方法を中学校教諭が

¹⁾ 宮崎大学大学院教育学研究科

²⁾ 宮崎大学教育文化学部

³⁾ 宮崎大学教育文化学部附属小学校

⁴⁾ 宮崎大学教育文化学部附属中学校

参観して学ぶというスタイルは今年度もとることができた。毎年同じ単元・同じ内容が取り上げられるが、本年度は点対称の図形の中心を見つけることを目的とした数学的活動を、班活動を中心として行ったことが特徴であった。これは、本年度の目的である集団活動による指導を実践したものである。

附属中学校教諭による小学校6年生を対象とした授業は、2月に河野和弘が行う予定である。

大学教員による講義

大学教員による附属学校教諭に対する講義も毎年行われていることであるが、本年度は、10月に添田佳伸が行った。タイトルは「活用力をつけるために」である。新しい学習指導要領のキーワードとして「習得」「活用」「探求」が挙げられているが、その中でも今注目されている「活用」に焦点をあて、活用する力や活用の具体的場面について話をした。

3 研究の成果

研究計画に従い、順調に研究を遂行することができている。特に乗り入れ授業に関しては、事前の指導案検討、授業実践、事後検討を例年行っているが、本年度は特に集団活動を取り入れた学習指導として班活動を取り入れ、その有効性について検討した。点対称図形の中心を探す活動を4人の班で行うという数学的活動を取り入れたが、各班とも積極的な意見交換が行われ、それぞれの班独自の方法を見つけ発表していた。班によって取り組む課題が異なっていたが、多様な解法を提示することにより、点対称図形の性質についての深い理解へとつながった。個人解決から集団解決へ移る際に小集団解決(班活動)を取り入れる場合とそうでない場合があるが、今回の実践は、取り入れることが有効に作用したと考えられる。

また、大学教員による講義については、今回の学習指導要領の改訂に合わせた内容となっていた。昨年も中学校の「資料の活用」に関する講義(藤井良宜が担当)であり、引き続きタイムリーな内容であった。活用を図る前提として習得が十分にできていることがあげられるが、これは、本研究の目的である基礎・基本の定着と同じことである。活用を図る場面は算数・数学の授業の中に多くあり、児童生徒の態度の育成も課題であることがわかった。

4 今後の課題

上でも述べたことではあるが、計算技能調査の実施及びデータの分析はこれからである。年度末にかけて取り組んでいく必要がある。また、附属中学校教諭による小学校での授業実践(乗り入れ授業)も残っている。ただ、これらは確実に行われることが期待されており、いずれ成果が発表されるものと思われる。

本年度取り組んだ集団活動を取り入れた学習指導の工夫であるが、これについては継続的に取り組みその有効性を引き続き検討していく必要がある。集団活動についても4人の班活動以外の取り組みも実践していく必要がある。また、これまで取り組んできたコミュニケーション能力を高めるための授業実践に基づく研究も、集団活動を取り入れた学習指導と深い関係にあり、そのあたりの整理も今後必要となる。理論と実践との融合を図りながら継続して研究をしていく必要がある。